

イエズス会宣教師達と日本語

——ザビエル来日から 1560 年代までを中心に——

宇 野 有 介

はじめに

日本語と異言語である外国語との言語折衝を考察するにあたり、資料が残されているという点を考慮すると、イエズス会宣教師達の来日によるものが最古と考えられる。1549 年フランシスコ・ザビエルが来日して以来、布教活動のためには日本語学習と翻訳が必要不可欠な作業であったことは自明である。宣教師達の努力は、やがて神学校の設立や出版事業へと繋がっていく。

布教活動について具体的に述べれば、日本にキリスト教という新教を根付かせるためには、いかに日本に伝えられている仏教系などの宗教が悪の教えであり、自分たちのもたらす教えが善であり救いにつながるものであるかを説かなければ、日本人を改宗させられないことは言うまでもない。そのためには西洋の言語を知ることのない日本人を説教するにあたり、当然のことながらまずはじめに宣教師達が日本語を学び、コミュニケーションを図れるようにする必要があったのである。やがて、布教活動の見通しが立ち、改宗が盛んになると日本人の中からキリスト教の伝道者になる者の養成が試みられ、その段階に至ると、宣教師達が日本語を学習するという一方向の学習形態から、日本人の教徒にも、ラテン語やポルトガル語を学ばせて、西洋の教義書を理解させようとする、双方向の学習形態がとられる様に進展していく。

小稿ではザビエル来日から、コレジヨ・セミナリヨ・ノビシャートと言った神学校が創設される前の活動を開始した初期の段階、言うなれば 1579 年（天正 7）に巡察使であるアレッサンドロ・ヴァリニャーノが来日

し、改革路線を進めていく前の段階に焦点をあて、外国人の宣教師達がどのように日本語を捉えていたかという彼等の視線に着目し、日本語学習および翻訳の過程について考察する。

なお小稿においては、先行研究の整理が未完であることと、イエズス会宣教師達の布教活動を取り上げている研究書などにおいては、日本語学習の経緯について通史的に述べるに留まっているものが見受けられるため、日本に訪れた宣教師達が、イエズス会の本部や外地の拠点に宛てた「書簡」を軸に考察を加える形をとりたい。

I フランシスコ・ザビエルが見た日本

ザビエルが受けた日本の印象について、1549年11月5日〔天文18年10月16日〕付、パードレ・メストレ・フランシスコ・ザビエルが鹿児島よりゴアのサン・パウロのコレジヨのイルマン等に送った書簡から伺うことができる。

第一我等が今日まで交際したる人は新発見地中の最良なるものにして、異教徒中には日本人に優れたる者を見ること能はざるべしと思はる。この国の人は礼節を重んじ、一般に善民にして悪心を懷かず、何よりも名誉を大切とするには驚くべきことなり。国民は一般に貧窮にして、武士の間にも武士にあらざる者の間にも貧窮を恥辱と思はず⁽¹⁾。

ザビエルは日本人に関して良い印象を持ち、礼節を重んじるところや、社会的な地位について関心を示していたことが伺える。「国民は一般に貧窮」とあるが、1500年代にキリスト教が布教活動を行った地域の多くは、諸島部および沿岸部であり、農業・漁業が中心の比較的貧しい地域が多く、そのような土地に新しい宗教は根付きやすかった。実際に布教活動が開始されても、宣教師達の活動は貧富の差を感じさせないものであり、こ

のことが布教活動を行った地域において、急速に伝播した一因とも言えるであろう。

さらにこの書翰中には、キリスト教徒との比較や仏僧の腐敗、日本人が僧侶を尊敬する理由などが述べられており、布教活動をはじめるときに、既存の日本にある宗教と如何に異なるかを考察している。次に書簡に現れる宗教書類の翻訳に着目する。

当冬は日本語にて信仰箇条の詳密なる解釈を作り、これを印刷することに従事すべし。身分あるものは皆読み書きを知れるがゆえに、右の書ににつきてわが聖教を解し、我等が行くこと能はざる多くの地方に弘布せしめんことを期す。

新しい国での布教を始めるに当たり、領主などその国・地域の支配者から布教活動の許可を求める必要が生じる。日本においてキリスト教は初の布教となるわけであるから、キリスト教に関して十分な理解がなされているわけではなく、一から自分たちの教義を説明し、キリスト教のもたらす功利について支配者達に説明することが不可欠となる。そのために教義書の翻訳作業が急務となったわけである。

Ⅱ 日本語と中国語

宣教師達の残した書簡の中には、日本についてだけではなく、他国に関して触れられている書簡も存在する。その中でも「言語」に関する資料となりうる書簡を取り上げる。

1552年1月29日〔天文21年1月4日〕付、パードレ・メストレ・フランシスコザビエルがコチンよりパードレ・メストレ・イナショ・デ・ロヨラに宛てた書簡の中で、「ジョアン・フェルナンデスはレゴ⁽²⁾にしてよく日本語を話し、パードレ・コスモ・デ・トルレスの通訳を勤む⁽³⁾。」とあり、来日から2年後には、組織の中で通訳としての役割を果たしていたも

のがいることが伺える。フェルナンデスの日本語に関しては、1555年9月23日付、パードレ・バルテザル・ガゴが平戸よりインドおよびポルトガルの耶蘇会のイルマン等に宛てた書簡の中でも、その精通ぶりを伺わせている。しかしながら当時の宣教師達の日本語は完全なものとは言い切れないものであったことが、後述の書簡から読みとれる。

さらに同書簡では日本語と中国語の相違について次のように述べられている。

シナ人と日本人とは言語大に異り、話は互に解することを能はざるも、日本人がシナの文字を知り、書きたるものを解することは甚だ驚くべきことなり。シナの文字は諸大学においてこれを教へ、これを知れる坊主等は諸人より学者と認めらる。シナ文字は一字ごとに一物を示し、日本人がこれを学ぶに当たりては、シナ文字を書き、その上にその示す物を画けり。もし文字が人を示す時はその字の上に人間の形を画き、他の一切の文字につきてもまた同様にし、文字は集まりて辞書を成す。日本人がこの文字を読むときは日本語にて読み、シナ人はその国語にてこれを読む。これゆえに話すときは互いに解せず、文字を書きてのみ互いに了解す。蓋し文字の意味を解すれども国語は異なるがゆえなり。

この一説は、表音文字を用いている西洋人が、「漢字」と言う表意文字を目の当たりにした所感であり、日本語と中国語の比較について語っている重要な資料と言える。文中では、使用する文字（漢字）は共通であるにもかかわらず、話すことによって通じず、書くことによってはじめて伝達できるという点について詳細に述べられ、文字と音はその国・民族によって異なり、必ずしも文字が一致するからと言って発音が共通であり、会話ができるとは限らないという、表意文字の形態について述べている。

書簡の末尾では、「我等は日本語にて世界の創造およびキリスト一代の

秘蹟に関する書物を作り、つぎにこの書物をシナ文字にて書き、シナに赴かばシナ語を習得するまでこれを用ひて説教をなすべし。(後略)」とある。

当面の間は日本語によって執筆することとなるが、前述の文字の原理を利用して、その書物を今度は漢字に変換し、後々は中国語での説教を目論んでいたことが伺える。日本における布教が安定した後は、中国を拠点に活動を検討していたものと推測できる。

さらに 1554 年 12 月 3 日 [天文 23 年 11 月 9 日] 付、耶蘇会のインド管区長パードレ・メストレ・ベルショール・ヌネスが日本に赴く途中、マラッカよりポルトガルの耶蘇会のイルマン等に送った書簡の中で、「我等日本に赴く者はよく言語を解せざるべからず⁽⁴⁾。」と記されており、西洋の言語と大きく形態を異にする日本語の学修の必要性に関して述べている。

Ⅲ 日本語の文字

次に「日本語の文字」について考察する。「漢字」と「かな」に関しては書簡の中にも登場し、宣教師達が苦勞して学んでいる様子と同時に、宣教師達のもとを訪れ教えを受けている日本人においても「漢字」を理解できる者は少数であったことが読みとれる。文字が分からないものは、改宗した信者の内で、仏僧から教えを受けたことがある者などに日本語の文字を習いながら、キリスト教の教義を聞いていた。文字を題材とする物として、次の書簡を考察する。

1555 年 9 月 23 日 [弘治元年 9 月 8 日] 付、パードレ・バルテザル・ガゴが平戸よりインドおよびポルトガルの耶蘇会のイルマン等に宛てた書簡においては、次のように述べられている。

彼等の文字は不完全にして我等の言葉に対する文字はなく、文字をもって発音を示すこと能わざるものあり。彼等は二様の文字を有し、我等は彼等の言葉を悉く発音し、またこれを書くことを得れども、彼

等はこれをなすことを得ず。日本の文字は二つの意味を有し、また二つ以上を有するものあり。たとへば上に揚げたる第一の文字⁽⁵⁾は靈魂といふ意なるが、また悪魔といふ意あり。重立ちたる人々が知らんと欲するはこの文字なり。下に掲ぐる他の文字は普通に用ひらるるものにして、第一の意味のほかなく、我等の書物はこれをもって書けり⁽⁶⁾。

二様の文字とは、「漢字」と「かな」のことで、文字の使い分けについて指摘している。また二つの意味を有すと言うのは、表意文字である「漢字」特有の性質であり、宣教師達には理解し難いものであったと思われるが、漢字の用途、使用者は限定されていて、多くは「かな」を用いていると指摘している。当時の日本語の使用状況をよく観察し、書物の執筆に当たっても活用しようとしている姿勢が伺え、日本語学習と並行して日本語研究にも重きを置いていたことが読みとれる。

Alma	Besta
魂	畜生
Sol	Lua
日	月
Ceos	Homem
天	人

Alma	Besta
たましゐ	ちくしやう
Sol	Lua
ひ	つき
Ceos	Homem
てむ	ひと

IV 日本語学習の進展

しかしながら、それまで宣教師達の日本語が不完全なものであったことが次の書簡から読みとれる。1557年10月28日〔弘治3年10月7日〕付、パードレ・ガスパル・ビレラが平戸よりインドおよびヨーロッパの耶蘇会のパードレおよびイルマン等に送った書簡の中では、「今日までは大に通訳の欠乏を感じしが、今は多少の別あれども我等は皆国語を解しましたこれを話せり⁽⁷⁾。」と述べられている。

本書簡が書かれる2年前の1555年の9月の書簡では「パードレ・バルテザル・カゴが編纂せる一書」の翻訳が行われていることが記されている

が、精度という観点で検討してみると十分な翻訳ではなかった可能性が1557年10月の書簡から指摘できる。確かに1555年当時であっても、各地で説教を行っていることから、ある程度の翻訳は可能であったと思われるが、内容の正確さという点を考慮したときに、多少なりの歯がゆさを感じながらの執筆であったと思われる。

1557年の段階においては、日本語の学習は十分なコミュニケーションを図れるレベルにまで達したことが読みとれる。一方で「これを話せり」とあるが、「書けり」と言う文句が見受けられず、会話はスムーズになったが、表記が複雑な日本語を用いて「書く」ということに関しては、もう一步と言うニュアンスが含まれていると考えられる。

語学の進歩は、1558年1月10日[弘治3年12月21日]付、パードレ・メストレ・ベルショール・ヌネスがコチンよりポルトガルの耶蘇会のイルマン等に宛てた書簡⁽⁸⁾にも記述がなされている。

パードレ・コスモ・デ・トルレスおよび日本人に説教をなす特能を有するイルマン・ジョアン・フェルナンデスは豊後に在り。日本語を知らざればなすこと多からざるがゆえに、我等到着後住院において日本語を教ふることに大に努力し、パードレ・ガスパル・ビレラおよび同地に留りしイルマン三人はすでに大に語学に進歩せり。

日本語が理解できないと、布教活動が円滑に行えないため、布教前の段階として、まずは日本語の習得が重要視されたことを書き記している。先に来日し円滑なコミュニケーションを図れるようになった者が教師役となり、後進の指導に当たっていた。

次に日本語学習の様子が書かれているものとして、1559年11月1日[永禄2年10月2日]付、パードレ・バルテザル・ガゴが府内よりインドの耶蘇会のイルマン等に送った書簡がある。

普通勤務の余暇は国語の学修と書方に費し、住院においては日本語のほか話さず、食卓に着けば常に同国語の説教あり。夜に入りて住院の者は皆礼拝堂に、院外の者は会堂に集りてラダイニヤを唱へ、終わりにてデシピリナを行う。夜は番を定めて住院を警備し、一瞬も無益に過ぎざるをもって日本人の教訓となれり⁽⁹⁾。

余暇にも日本語を欠かさず、さらに住院においても、日本語以外を用いない、すなわち自国語を話さないようにすることで、日本語を習得しようとした経緯が記されている。また布教を行う者として、時間を無益に過ごさず、人々の手本となるようにする努力していたことが伺える一節でもある。

1559年11月20日〔永禄2年10月21日〕付、イルマン・ルイス・ダルメイダが豊後よりゴアの耶蘇会のコレジヨの某イルマンに宛てた書簡において、日本語学習の目的が明確に記されている。「我等が皆健康にして当地のキリシタン等を教ふるため国語を学べるは主を賛美すべきことなり⁽¹⁰⁾。」とある。同書簡ではキリシタンとなる者が絶えないことを伝えており、布教活動の組織が拡大するにつれ、言葉の壁を乗り越えられないことには、活動できないことが明確化し、今まで以上に布教のための日本語学習が求められた時期とも言えよう。

ザビエル来日からおよそ10年で、早くに日本語を習得した者は、後進への教授に当たり、さらには教義書の翻訳作業にも力が注がれるほど、日本語学習に対する意識は高まりを見せた。また語学に費やした労力も信者の増加と言う形で、報われつつあり、日本語学習と布教活動とが一体化し、円滑に滑り出した時期とも捉えることができる。

続いて1560年10月20日〔永禄3年10月2日〕付、パードレ・コスモ・デ・トルレスが府内の住院よりコチンの耶蘇会のコレジヨの院長パードレ・メストレ・ベルショール・ヌネスに宛てた書簡では、「尊師⁽¹¹⁾が残

し置かれたる有益なる書はすでに日本語に翻訳し、異教徒の間にデウスの教を説くに利用せり⁽¹²⁾。」と複数の教義書の翻訳を伺わせる記録がなされており、布教に使用する書物が順次日本語訳されている経緯が読みとれる。

V 日本人の性質

日本語学習の経緯と併せて着目すべき点は、宣教師達が見た「日本人の性質」についてである。書簡の中には布教活動を進めるにあたり、日本人がいかなる人種であるかと言うことを、外地のイエズス会に報告するために、述べられているものが散見される。必然的に日本人の外国語学習に取り組む姿勢なども併記されているものもあり、これらについて考察する。

「日本人の性質」が記されている書簡の多くに共通する日本人の特徴は、フランシスコ・ザビエルも1549年11月5日付の書簡で述べたように「日本人は礼節を重んじる」と言うことである。礼節を重んじる風土であるが故に、礼儀正しく接することで、ひとたび信頼関係を構築すれば、布教を円滑に進められるという期待を覗かせているものも見受けられ、後は自分たちの教義を如何にして伝え、如何にして日本に伝わっていた宗教が邪宗であり、改宗すべきと言う説教を行うことに重きが置かれていた。

1560年12月1日〔永禄3年11月14日〕付、イルマン・ゴンサロ・フェルナンデスがゴアよりコインブラの耶蘇会のコレジヨの某イルマンに宛てた書簡において、

この地においては武士はポルトガルにおいてのごとく世襲の財産を有せり。ただしその臣下はその奴隷となり、もし反抗する者あればこれを殺すも何ら罰を受くることなし。この国民は色白く見識あり、甚だ礼儀正しく、大に衣服を用ふ。食するに棒を用ひ、美食なれどもその量少なし。彼等の間に宿屋および商店あり、その子を育つるに当り

大にこれを愛し、これを懲すことなし。彼等は何にても食すれども、坊主のみは牛肉を食はず。彼等の奴隷に対する罰はこれを殺すにあり、彼等の間には盗人なし、彼等は甚だ厳しく、もし盗みたる時はいかに少しの品物たりともこれを殺す、この地はポルトガルにあると同じ食糧を有すれどもその額少し、彼等は労働せず、飢餓する者甚だ多し、この地は甚だ寒し⁽¹³⁾。

と、日本人の気質や風土について述べられている。日本人の教育に関する詳細な記述は見受けられないが、「見識あり」との一文が載せられている。後に有馬セミナリヨが創設された頃に記録された「日本年報」の記録を見ると、

生徒は学問にも甚だ熱心で、全く期待した以上である。才智と記憶とにおいては、彼等は大いにヨーロッパの少年に勝り、わが文字は彼等の見たことのないものであるにかかはらず、僅に数ヶ月で読み書きに熟達し、彼等がヨーロッパのセミナリヨにおいて養成する少年よりも優れてゐることは否認し難い⁽¹⁴⁾。(後略)

とあり、語学の学習を例に賞賛している記述が見られる。類似したものが、1561年10月8日〔永禄4年8月29日〕付、イルマン・ジョアン・フェルナンデスが豊後より耶蘇会のイルマン等へ送った書簡の中にある。

当住院には日本人六人、うち大人四人小人二人あり。(中略) 大人も小兒もその国語に訳したる福音書および説教の大部分を暗記せるが、彼等はこれまでかつてこのことにつき話したは聞きたることなきにかかはらず、二、三時間にて容易に暗誦す⁽¹⁵⁾。

当時の日本における教育は仏教の寺院が行う、読み書きなどの初歩的な教育が中心であり、今日の様な学校教育とは大きくかけ離れていた。学校

と呼ばれるものは、「板東の大学」と称された、足利市にある「足利学校」など少数であり、学校の数のみならず、自給自足の生活形態により、教育を受けられる環境にあった子供達は極めて少数である。

宣教師達が神学校を設置した九州の地域も例外ではなく、生活は貧しく食糧事情も悪い地域であった。そのような背景にも関わらず、ヨーロッパのセミナリオにおいて養成する少年より優れているとされるのは、「礼儀正しい」と言うことが大きく影響していると考えられる。他の書簡などからも「不平不満を口にしない」ということを伺わせる一文が散見され、礼節を重んじて、上の者には黙って従うという姿勢が、宣教師達には「熱心さがあり期待できる」と受け止められたのではないか。また暗記力の素晴らしさに関する賛辞も前出の書簡などの様に見受けられる。

さらに書簡においては「盗人なし」という記録が見られ、倫理的にも評価されていたことが記されている。当時は戦乱の世であったが、この戦争に関しても「名誉を重んず」ところに起因するという内容が次に紹介する書簡に記され、君主への忠誠を伺わせている。

1561年10月8日〔永禄4年8月29日〕付、パードレ・コスモ・デ・トルレスが豊後よりインド管区長パードレ・アントニオ・デ・クワドロスに宛てた書簡より。

国民は大に戦争を好み、名誉を重んずる点においては昔のローマ人に甚だ似たり。彼等の主なる偶像は名誉の神にして、したがって彼等の間には戦争多く、これがため死する者また多し。また名誉を失ひたりと考ふる時自殺する者多し。このゆえに物を盗み、他人の妻を奪ふことその他類似の悪事または醜事を行はず。またデウスを畏れざれども、名誉のためその両親を尊敬し、友人に対して忠実なり⁽¹⁶⁾。

いかに名誉を重んじ、辱めを受けるような行為を嫌悪するような民族であるかということが述べられるとともに、血縁者や友人との接し方に関し

て、礼節を重んじる民族であると受け止めている。

VI 日本の宗教

次に日本人の信仰する宗教に対する、宣教師達の視線について考察する。宣教師達の活動の第一義はキリスト教の布教にあったことと、キリスト教の布教活動においても子供の教育に着目していることから、学習の対象者の選定、言い換えれば転宗する可能性のあるものの選別と言う作業が生じる。

日本に伝わっている宗教を邪宗と捉え、嫌悪を示している様子が前出の1561年10月8日付、インド管区長パードレ・アントニオ・デ・クワドロスに宛てた書簡から伺える。

彼はもと坊主の僧院において日本の文字を学びしがゆえに、これをキリシタンの子供等に教授せり。坊主等は僧院に在る少年等に多くの不善および悪風を授くるがゆえに、僧院において学びたる者は皆悪魔の子となれり。パードレはこの弊害を防ぐため、キリシタンの子は悉く住院に來りて文字を学び、これとともにドチリナを覚ゆることとなしたり。課業を始めし以来約十ヶ月なるが、この短期間に覚えたる文字は、僧院において二、三年間に学びたるものより多し。たえず出席する者の動作應對を見れば、日本人の子にあらず小天使ならんと思はる⁽¹⁷⁾。

この文では仏教の寺院に預けられた子供を「悪魔の子」と称し、僧院に対する批判を「弊害」と言う形で痛烈に述べている。新教として活動を拡大するためには、既存の物を否定する必要が多少なりとも生じることであるが、この考えは純粹にキリスト教の教えに基づく物なのか、個人的な感情が移入している物なのかは判断がつかない。

確かに宣教師達は自分たちの教義を絶大なる物として、熱心にその布教

に当たっていることは、多くの記述から読みとれることであるが、その反面、住民から石を投げられたりと、摩擦を生じていることも事実である。中には語学の習得に苦しみ、円滑なコミュニケーションが図れないがために、齟齬が生じたり、日本人に対して少なからず嫌悪感を懷いた者がいたことは想像に難くない。そのことが後の 1579 年口之津における「第一回日本キリスト教協議会」の中で、日本人が伝達者となりうるかと言う形で出現するのである。

布教活動が進み改宗も進んでいく中で、日本人が最後まで抵抗感を顕わにしたのが「葬儀」をめぐる問題である。V 章で取り上げた、1561 年 10 月 8 日〔永禄 4 年 8 月 29 日〕付、イルマン・ジョアン・フェルナンデスが豊後より耶蘇会のイルマン等に送った書簡において、

異教徒等も死者のため祈り、また種々の儀式を行ひ、坊主および他の客を招きて、死者のため盛なる葬儀を行ふことは古来の習慣にして、もしこれをなさざれば世間の批評を受くるがゆえに、資力なき者はこれがため借金をなすほどなり。初め我等は死者のため儀式をなさざるべしと考へ、キリシタンとなることを拒絶せし者多く、またキリシタンとなりても止むること最も困難なりしは死者に対する儀式なりき。このゆえに我等が葬儀を行ひ、名誉をもって遺骸を葬るべき理由を説明せるを見て、キリシタンは大に力を得、異教徒もまた感激し、従前わが聖教を悪罵せし者もその父母または子女に対して葬儀を行ふを見て、キリシタンとなることしばしばあるはデウスを讃美すべきことなり⁽¹⁸⁾。

と記され、キリスト教式の葬儀に誤解が生じていたこともあり、改宗するか否かという最も重要なポイントが「葬儀」にあったことも伺える。さらに着目したいのが、旧来から日本で行われていた葬儀では、資力が無ければ借金をしてまでも盛大に行われていることが述べられている。

前述の通り、日本における活動地域は比較的貧しい地域が多く、食糧も満足になく飢餓が続く地域もあり、その中で「借金」をすることは非常に困難であったと予想される。これに対し、キリスト教で名誉をもって遺骸を葬るのであれば、仏僧を呼んで多額の費用を使って行う旧来の方式からの脱却が生じることが推測される。この書簡からも「貧しい地域に根付きやすい新教」と言うことが伺えると共に、貧富を問わず分け隔て無く接する活動であったとも評価できるであろう。

VII ラテン語学習へ向けて

これまでは宣教師達の日本語学習に注目したが、その学習も一段落し、後から来日する者へ教授できるほどになると、今度は日本人へのラテン語の教授が行われるようになる。

1564年10月3日〔永禄7年8月28日〕付、パードレ・ルイス・フロイスが平戸よりインドに在る耶蘇会のイルマン等に送った書簡において、

日本においては今日までラテン語の順序に従へる文法書なかりしがゆえにその語を学ぶに当たり困難を感じたれば、イルマン・ジョアン・フェルナンデス（その時少しく暇あり、これに従事する意ありしがゆえに）動詞変化、過去、文章論その他必要なる規則を備えたるものを作り、なほアルファベット順に配列せるポルトガルの語彙と日本の語彙を添へたり。この編纂に六、七ヶ月を要せしが、デウスの御慈悲によりこれを完了し、然もその説教および通常の任務を少しも怠ることなかりき。この書は国語をもって靈魂に実を結ばしむるための当地に最も必要なるものの一つなり⁽¹⁹⁾。

と記されている。これまでも福音書の暗誦という形で、日本人に教えたことは記録されているが、動詞の変化などの規則性を整理した文法書を作製し、教義を理解させようとする試みは初めてである。

この一節は宣教師が日本語を学ぶだけの一方向の言語学習であったものが、ザビエル来日から15年で、宣教師達からは日本人にラテン語を教授するという、双方向の学習が可能な形態に突入したことの証と言える。

しかしながら、宣教師達の日本語学習や日本語研究はこれで終わったわけではなく、今までの言語学習はこれから展開される出版事業への助走に過ぎない。この後、神学校設立や活版印刷機の導入と共に日本語研究は大きな伸展を見せ、最終的には『日葡辞典』などの大がかりな辞書の編纂へと繋がっていくのである。それと同時にラテン語やポルトガル語の学習も神学校を中心に進められていくこととなる。

おわりに

ザビエル来日から約15年間の経緯について、宣教師の視点を中心に考察してみた。これはあくまでも宣教師達の視線であって、この内容が西洋人全ての眼ではないことは言うまでもない。しかしながら、布教活動の過程における労苦の記録などは、当時の日本を捉える上での一資料として貴重な物であったと言えよう。特にⅡ章で触れた日本と中国を比較した西洋人である宣教師の視点という点は特筆すべき事項であると考ええる。

日本語学習の進展について総括すると、起源は布教の許可を支配者に得るための交渉によるものと言える。そのためには教義書の翻訳が不可欠であり、日本語への翻訳が急がれた。ザビエル来日から約10年で語学の問題は落ち着きを見せ始め、後進への教授や日本語研究への伸展が見られ、15年経過した頃には、日本語を学ぶだけでなく、日本人にラテン語を教えるという段階に突入した。さらには動詞の活用に着目した文法書や、辞書の編纂へとつながっていくのであるが、これらに関しては1560年代後半の布教の経緯と併せて、別の機会に考察したい。

宣教師達の活動は、1579年に巡察使である「アレッサンドロ・ヴァリニャーノ」が渡来することで大きな転機を迎え、神学校の建設や増え続ける信者に対応するための伝道者の養成と進展していくのである。しかしな

がらこの活動も順調に進んだわけではなく、豊臣秀吉の伴天連追放令などの弾圧を受け、神学校も各地を転々としていくことになるのである。

最後になるが、複数の書簡などから宣教師達の日本語学習の過程を考察していくと、日本語の習得までは初学者においておおよそ2年程度であったということが指摘できる。このことは今日、多くの日本語学校で行われている日本語学習のカリキュラムとのつながりを予感させる事実である。残念なことに宣教師達の残したものは少なく、神学校のカリキュラムや教育内容に関する詳細な資料は僅かであることに加え、今日実施されているような日本語能力試験など、尺度を測定するものは存在するはずが無く、語学の習熟度に関しても正確な比較は行えない。両者の関連性を明確に指摘することは困難であるが、しかし日本語の習得にかかる時間軸として、感覚的なつながりはあると言えるのではないか。

〔参考文献〕

- ・新村出著『日本吉利支丹文化史』昭和16年・地人書館発行
- ・村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『イエズス会士 日本通信 上』昭和43年・雄松堂書店発行
- ・村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『イエズス会士 日本年報 上』昭和43年・雄松堂書店発行
- ・『天草学林 論考と資料集』昭和52年・天草文化出版社発行
- ・『天草学林 論考と資料集 第二輯』1995年・天草文化出版社発行
- ・今村義孝著『近世初期天草キリシタン考』平成9年・天草文化出版社発行
- ・五野井隆史著『日本キリシタン史の研究』平成14年・吉川弘文館
- ・本渡市教育委員会編『天草の歴史』平成14年・本渡市教育委員会発行

〔註〕

- (1) 村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『イエズス会士 日本通信上』4頁 昭和43年・雄松堂書店発行メストレは学位を指す。
- (2) レゴ＝俗務を執る会員のこと
- (3) 注(1) 41頁
- (4) 注(1) 65頁
- (5) 「魂」を指す。
- (6) 注(1) 102頁。図版は同書102頁中央。

- (7) 注(1) 142 頁
- (8) 注(1) 162 頁
- (9) 注(1) 175 頁
- (10) 注(1) 188 頁
- (11) 尊師=手紙の受取人である、「パードレ・メストレ・ベルショール・ヌネス」を指す。
- (12) 注(1) 193 頁
- (13) 注(1) 200 頁
- (14) 1581 年日本年報より。村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『イエズス会士 日本年報 上』40 頁 昭和 43 年・雄松堂書店発行 / 日本年報=イエズス会の総長宛てに送られた布教活動の報告書。
- (15) 注(1) 236 ～ 237 頁
- (16) 注(1) 224 ～ 225 頁
- (17) 注(1) 238 頁
- (18) 注(1) 248 頁
- (19) 注(1) 389 頁